『ひとがつながるまちづくり』

講師　山崎　亮
studio-Ｌ代表
コミュニティデザイナー
京都造形芸術大学教授、
慶応義塾大学特別招聘教授

今回のセミナーは、『ひとがつがなるまちづくり』と題し、コミュニティデザイナーの山崎亮さんを講師にお招きしました。

全国各地でひとがつながるしくみづくりに携わっている山崎さんは、課外学習で参加した高校生をはじめ多くの参加者の前で、様々なプロジェクトについてユーモアに満ちた内容を熱く語って頂き、大変有意義なセミナーとなりました。

講演内容（一部抜粋、要約）

コミュニティデザインという仕事

・デザイナーは、いろいろなものをデザインしていくが、大きなホールを造っても、図書館を造っても、町はあんまり元気にならないなと思うことが多かった。
・徐々に、物ではないデザイン、人と人のつながりをデザインしていくという仕事を、誰かがやったほうがいいのではないかと思っていた。
・そんな中、公園のアレンジメントをしたところ、「そのやり方は面白いね」と言われ、鹿児島のマルヤガーデンズとか、大阪の近鉄百貨店の新本店を元気にしてほしいと言われるような仕事をやるようになり、さらに「デパートが元気にできるんだったら、商店街ができるんじゃない？」ということから、「じゃあ、集落はどうだ、郊外の住宅地はどうだ、医療施設や福祉施設はどうだ」というふうに言われるようになった。
・「頼まれるなら、やってみよう」ということで、コミュニティデザイナーとして仕事をしてきた。
・大学にコミュニティデザイン学科をつくり、コミュニティデザインという仕事をやる人を育てたい。

泉佐野丘陵緑地パーククラブ　～20%の公園づくり～

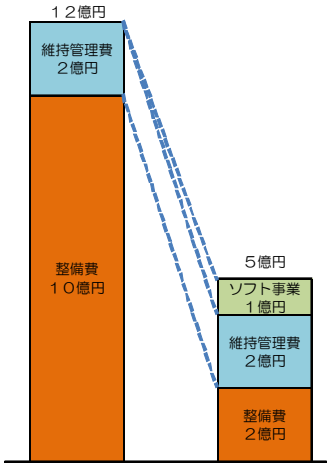
【特色】

・公園をつくるときは平面図といわれる図面を描くが、この公園では、公園を「つくる」のではなく、公園をつくる「コミュニティ」をつくっていったらどうかと考え、公園面積の約 20%しか図面を描かなかった。
・例えば、木を切り倒して公園の中に舞台をつくっていく人たち 30 人とか、水辺の生き物観察会ができるように水辺を少しきれいにしていく人たち 30 人とか、公園をつくるコミュニティを毎年 30 人つくり、それを 10 年間続けて、その 300 人が公園を訪れる人を「ようこそ」と迎え入れてくれる人たち、日常的には公園を維持管理してくれる人たちになれば、わざわざ公園全部のハード整備をやらなくてもいいのではないかと考えた。

【コミュニティ】

・公園に関する 11 回の養成講座を開き、11 回全部出席した人にのみ修了証を交付し、交付を受けた人が、森の中に入り公園をつくり続けている。（これまで 4 期生、約 120 人が修了、「パーククラブ」というクラブもつくられた）

【効果】



〇公園全部をハード整備した場合（金額は仮）

整備費：約 10 億円

維持管理費：年間 2,000 万円

10 年間の事業費：12 億円

〇このプロジェクトの場合（金額は仮）

整備費：約 2 億円（公園面積の約 20%しかハード整備しないため）

維持管理費：年間 2,000 万

ソフト事業費：年間 1,000 万円

10 年間の事業費：5 億円

→お金もかからず、パーククラブのメンバーが公園をつくり、10 年後（今年で 5 年目）には公園が完成し、「ようこそ」と迎え入れてくれる人たちがいる公園となる。

草津川跡地整備　～ワークショップのデザイン～

【概要】

・草津川跡地に住民の方々と話し合って公園をつくる。

（草津川は付け替えを実施し、旧草津川は空地となった）

【ワークショップ】

〇テーマカラーの設定

・川をイメージしてもらうように水色に設定し、きっちりと全面（ワークショップで使用する資料、付箋、チラシ等）に使用した。

〇参加者募集チラシの作成

・ワークショップに参加してもらいたい層の人たち（30 代とか 40 代ぐらいの子育てをやっているお母さん）が、手に取りたくなるようなチラシをデザインした。

・チラシは、チラシが置かれるラックの大きさを考え A4 サイズとした。

・チラシの下部は、ラックに置かれた他のチラシで隠れてしまうということから、上部３分の１の部分に必要な情報を書くようデザインした。

〇配布資料の工夫

・配布資料を重ねていくと、1 冊の本になるような仕組みにした。（例えば、ページ番号、これを全部通しにしておいて、12 回のワークショップに全部出たら、1 冊の本が完成するような資料にしておく）

〇ワークショップ中の工夫

・説明時に使用するパワーポイントも、テーマカラーに色をそろえた。

・テーマカラーを水色にしたのは、草津川だから川をイメージさせるという理由だけではない。

・テーマカラーを決めるときは、付箋の色に合わせるようにしている。

・参加者の意見を色に分けて付箋に書いてもらうので、付箋の色でパワーポイントをつくっていくことができれば、どんな意見があったのか直感的に分かる。

・テーマカラーを付箋の色と大きく違う色に設定してしまうと、グラフィックを作りにくいので、付箋の色と全体のテーマの色をうまく関連づけておいたほうがその後の資料をつくりやすい。（すると、参加者が「自分が言った意見が資料のどこに入るのか」と期

待するようになり、次回のワークショップにも来てくれる）
・それぞれのテーブルから出た意見を即座にまとめ、それをビジュアライズできれば、参加者に意見を視覚的に見せることが可能となり、「あっ、それだったらもっとこんな意見を出したい」という気持ちにさせることができる。
・参加人数が少しずつ減っていくワークショップがあるが、その理由の一つはデザインのまずさにあるかもしれない。

観音寺まちなか再生プロジェクト　～店の中の店づくり～

【観音寺のまち】
・香川県観音寺市は、人口約６万 2,000 人、商店街はシャッター街になってきている。
・この商店街では、下着屋の中にケーキ屋があるなど、店の中にもう１個別の店があるという面白い状態が生まれている。（親子がそれぞれの店を経営している）

【商店主とのワークショップ】
・商店主の方々に、これからは全部の店を「なるほど、こういう組み合わせか」と思われるような組み合わせの店にして、感動できる商店街をつくっていけば良いと話した。
・もし「カフェをやりたい」、「雑貨屋をやりたい」という若い人がいたら、お店を入れてくださいとお願いしたところ、「それだったら、やってやろうか」と、「うちが店を開けている間だけ、その人の店をやらせてやってもええ」ということで、理解があった。

【今宵もはじまりました】
・次に、商店主のおじさんたちが若い人と出会う方法をワークショップで１年かけて話し合いをしたが、答えは見つからなかった。
・ワークショップでは答えが見つからなかったが、思わぬところから面白いアイデアが出てきた。
・ワークショップじゃなく、終了後に飲みに行くことを楽しみにしている商店主がたくさんいたが、目的はワークショップなので、「飲みの誘いは禁止」とした。
・誘っちゃ駄目だと言われているから、仕方なく１人で居酒屋に行く商店主が、１人で飲んでいるのは寂しいと、スマートフォンで自分が今飲んでいる状態を写真に撮って Facebook に、「今宵もはじまりました」とアップしたところ、実は飲みに行きたかった他の商店主たちも「今宵もはじまりました」と、つぶやくようになった。

・香川県の観音寺市でのプロジェクトにも関わらず、全国の人たちが「今宵もはじまりました」に参加し、そこで会話をしながら、全国の人たちが飲むようになってきた。
・商店主たちは、自分たちが全国的に注目を集めていると少し勘違いしてしまい、ユーストリームを使って「今宵 TV」というテレビ番組を始めてしまった。
・この番組は、商店主たちが公民館などにお酒を持って集まって、お酒を飲みながら話しているのを撮られているだけという内容で、観音寺の人たちだったら番組を見れば会場が分かるので、番組を見ているより、そこへ自分の家から酒を持って、自分も参加したほうがいいと考え、この会場に若い人も含めてどんどん人が集まってくるようになった。（番組は見ている人より出ている人のほうが圧倒的に多い）
・商店主のおじさんたちは若い人とは知り合えないという結論に至っていたのに、この番組やイベントを通じて徐々に知り合うようになり、若い人の中にカフェや雑貨屋をやりたい

という人が現れ、商店街のおじさんたちが、「誰の店を寄せる？」みたいなことを話している状態になってきた。
・「観音寺の町の中で、あなたもお店を開きませんか」ということで、チラシをまいて公募を始めるなど、２つずつ店が入っているという商店街をつくる活動を始めている。

小豆島瀬戸内国際芸術祭　～アートとつながり～

【作品づくり】

・小豆島から瀬戸内国際芸術祭というアートの祭典の作品づくりの依頼があった。
・以前に瀬戸内で仕事をした経験上、瀬戸内の離島の方々は「要らなくなったものを最後まで使い回すという技術」を持っているイメージがあったことから、要らないものでアート作品をつくろうといって、要らないものをたくさん探してもらった。
・要らないものはたくさんあったが、注目したのはプラスチック製の「醤油のたれ瓶」と酸化した「古い醤油」だった。（小豆島は日本有数の醤油の生産地）
・古そうな醤油を蛍光灯に透かして、新しいか古いかを判断する「醤油を透かす文化」があり、たれ瓶と醤油を透かすということでアート作品をつくれないか、住民の人たちに提案した。
・酸化してしまって要らなくなった醤油を、飽和食塩水で薄めて、きれいなグラデーションをつくり、後ろから光を当てると透き通ってすごくきれいな影ができることから、住民の人たちに高さ 3m、幅 18m の壁を全部醤油のたれ瓶でつくる提案をした。
・提案時に「誰がそんな面倒な作業をするのか」と会場の雰囲気が重苦しくはなったが、住民参加型として、みんな仕事帰りに作品づくりに参加してもらった。

【作品づくりから生まれたこと】

・つくりたかったのは「ひしお会」というコミュニティ、会の人たちは知り合いではなかったが、みんなで３カ月間ぐらいかけてあの作品をつくった結果、この人たちの間のつながりができた。
・彼ら自身がこういうつながりをつくって、今度はまちづくりのこんな活動をしようという話をしている。

【コミュニティをつくるきっかけ】

・コミュニティをつくるきっかけとして、今回のようにアートの作品をつくる、公園のマネジメントを考える、商店街で飲み会をするというのもいいかもしれない。
・最終的な目的は、地域で活動する人のつながりをどうつくるかということ。

将来に向けたひとづくり

【コミュニティデザイン学科】

・東北の復興を学生たちと一緒に支援し、東北の我慢強い人たちの口から意見を聞き出すこと、ファシリテート、引き出す、意見を出してつなげて、一緒にこの町をつくっていこうと思える、実地で勉強できる学科を来年の４月から東北芸術工科大学につくる。
・とにかく現場に入って、地域の人たちと一緒に語りながら元気にしていく。
・地域を元気にできる力を付けたら、自分のふるさとに戻ってコミュニティデザインの仕事をやってもらいたい。
・山梨の学生が山形に来てくれて４年間一緒に活動し、その後、卒業したら山梨を元気にするための仕事としてふるさとに戻ってきてほしい。

地域づくりは遠回りをしない幸福論

・幸せというのは身近なところでたくさん発見できるはずであり、それをどのように獲得していくかはわれわれの技術であると考える。
・「景気回復したら何がうれしいんですか」と聞くと、「給料増えて、例えば、でっかい車買って、みんなで旅行へ行っておいしいものを食べて、“私らは家族やな、友達やな”って、つながりを確認できるやんか。絆を再確認できるやん。そのためにはでかい車が欲しい。そのためには給料が上がらなあかん、そうやったら景気回復せなあかんや」という話になる。
・目的がもし家族や友達との絆を再確認することだったら、そんなに遠回りして絆を確認する必要はなく、空き家などに集まって、みんなでおいしいものを持ち寄って食べれば、「私らは一緒だ、友達だな」と再確認することができる。
・遠回りして幸福を得なくても、地域の人たちで集まって、商店街を元気にしていこうとか、ここで何か一緒にみんなでやってみようとか、まだ僕らが幸せになる方法は沢山あふれている。
・高齢者になって、福祉にお世話になる前に、地域で活動して毎日笑ったり、誰かとしゃべったり、一緒になってやりがいを持ったり、そういうことを続けていれば、ひょっとしたら、本当に寝たきりになるぎりぎりのところまで、みんなと一緒に何か助け合ったり支え合ったりしながら活動していくことができるかもしれない。
・そんな状態をどのように生み出していくかという部分でいうと、確かに福祉のお世話になった後の話も大事だが、その前をどう耕しておくかというのも、とても大事なことだと考えている。
・そのための幸福は身近に落ちているので、遠回りして考えないほうがいい。
・たくさんお金と物があれば幸せかというと、「そうじゃない」とはよく言われているが、やはり社会に出ると、お金や物の話になってしまう。
・お金や物の話をしていると、いつまでたっても満たされない状態になっていることに気付く、遠回りしない幸福論というのも覚えておくべきである。
・この 20 年のデフレ時代の間に、われわれは身近な幸福を発見する力を蓄えたはずなので、きっちりと地域を見据えて生きていくということが大事である。

質疑応答

質問：店の中に店をつくろうという動きは、日本全体に広がっていくか。

山崎：全国に広がっていくかどうかは分からない。毎回、頼まれたら、現場に行って話を聞きながら、今回だったらこんなやり方をしていこうというふうに決めるので、一つとして全く同じやり方をしたというのはない。

観音寺は、たまたま観音寺に行ってあれが面白いと思ったので、店の中の店というのをこれから進めていく予定だが、われわれがほかの商店街に呼ばれて、そこでも店の中の店をやったらどうですかという話は多分しない。

それが本当に良ければ、まねをしてどこかでやる人たちが出てくるかもしれないが、われわれが意識的にそれを何か全体に広げていこうとすることは、多分ない。

なぜなら、毎回新しいアイデアを出すのがわれわれの楽しみであり、解決策が毎回違うことが、自分たちの楽しみになっているからである。

質問：ワークショップなどで話し合いをする場合、多くの人の意見を取り入れたり、まとめたりする際の工夫はあるか。

山崎：合意形成の方法は、幾つかある。

付箋も一つのツールとなる。声が大きい人も、話が長い人も、7.5cm ほどのあの付箋の中に意見を書くしかない。一言で分かりやすく書いてくださいというと、全員立場が対等になる。誰かの意見になびかないように同じ大きさで全員対等に話を進めていく方法は一つの工夫である。それ以外にも、イエスアンドという話し方や、アイスブレークという緊張感を解くゲームを最初に行い、その後のワークの進行に関係づけておくかなど、幾つか工夫はある。

質問：知らない人と人をつなぐことはとても難しいと思う。講演の中で、その話し合いの前に参加者一人一人に話をじっくり聞くと言われていたが、その話を聞く中で一番大切にしていることは何か。

山崎：ワークショップ募集といってチラシをまいただけでは、多くの人が来てくれない。われわれはどこの地域に入っても、最初は地域の何か面白い活動をしている人たちの話を聞いて回るということをやる。そのときは、僕はあまり話をしない。僕は話せと言われたら、３時間、４時間話し続けられるが、聞けと言われたら、ひたすら聞く。

最初は、行政とかに「この地域で面白い活動をしている人３人紹介してください」と言って、その地域で面白い活動をしている人、NPO をやったり、サークルをやっていたりする人たちのところに伺って、どんな活動をしているかと話を聞く。「今、活動で困っていることはないですか」みたいな話をずうっと聞く。そして、最後に「あなたが、この地域で、“あいつはおもろいことをやっているな”と思う人を３人紹介してください」と言って、その人からまた３人紹介してもらう。

そうすると３人から９人、９人から 27 人紹介してもらうことになり、最終的に 100 人ぐらいの話を聞くことができ、誰が尊敬されているとか、誰と誰は同じテーブルにしてはいけないとか、そういうのが分かってくる。そういう地域の人脈図が見えてきたらワークショップにお誘いする。「この間言うてた話し合いの場をやるから、来てくださいよ」「公募が始まりましたから応募しておいてくださいよ」と言って、友達になった人たちを誘い、それ以外に一般で応募してくれた人たちが入って、100 人ぐらいの人たちが集まったら、その人

たちをミックスして、ワークショップを開催する。

事前に話を聞くことはとても大事なことであり、地域の情報を得るという目的と、その人と友達になるという２つの目的がある。この２つの目的で関係性をつくってからワークショップに誘う。ワークショップの参加者の半分には、事前に関係性をつくっておいたほうがいいだろう。

ワークショップに全員初めて会う人が 100 人来たら、僕らも緊張してしまうが、会場に集まった人の半分ぐらいが、もう前に話をしたことがある人だったら、入ってきてから、まず大きい声で、「あ、どうも、この間ありがとうございました、もらったまんじゅう、ものすごくうまかったですわ」と挨拶をする。すると、初めて会った人たちが、「あれ？　あの人は何や、ここの地域の人らと結びつきがあるんか」と、しかもしゃべっている人たちがけっこう地域で優秀な活動をしている人たちばかりだと、「おっ、何や、あいつ、けっこう知り合いは多いな」みたいな感じからスタートするので、ワークショップが少しやりやすくなる。

つまり、自分たちの緊張感を少し低めにするためにも、最初に１人ずつ会っていくというのは、手間だがやっておいたほうがいいプロセスだろう。

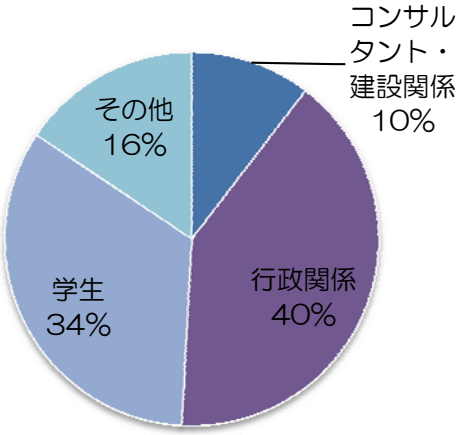
■第２５回ふるさとまちなみデザインセミナー

日　時：平成２５年１０月１５日（火）　１４：００～１５：３０
場　所：敷島総合文化会館　大ホール
参加者：２６６名

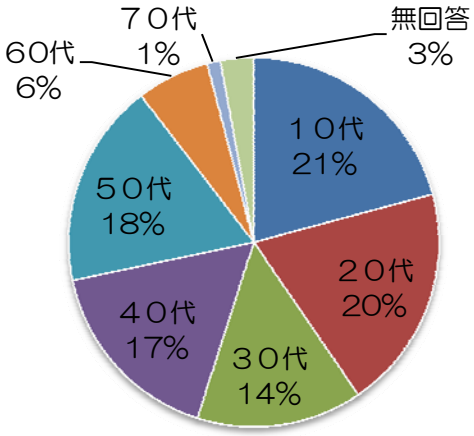
○参加者アンケート結果（抜粋）

アンケート回答数：173（参加者に対する回答率６５％）

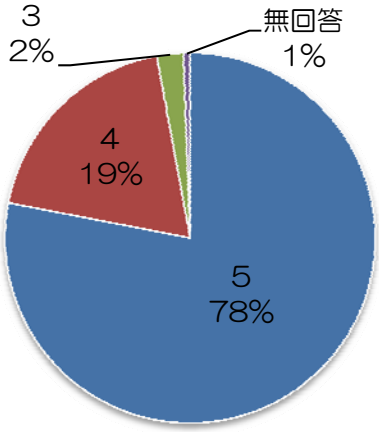
①職業



②年齢

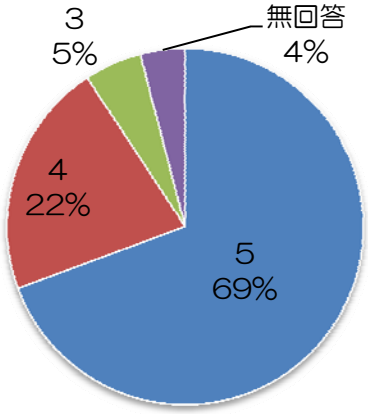


③セミナーに参加して良かったと思うか。（良かった　５－４－３－２－１　悪かった）



○主な理由

・具体的な事例がたくさん聞けて良かった。
・まちづくりに対する考え、コミュニティのつくりかたなど、大変参考になった。
・話がとてもわかりやすく勉強になった。
・コミュニティデザインという、ハードではなくソフト面によるまちづくりは今後重要になってくると思う。新しい形を知ることができて参考になった。

④本セミナーはまちづくりの参考になると思うか。

（参考になる　５－４－３－２－１　ならない）